

# オスタリー・パーク・ハウス、イーティング・ルームの豎琴の椅子

## 英国家具研究 (1)

### The Osterley Park House Eating Room Lyre-back chairs: A Study Series on English Furniture Part 1

新 井 竜 治\*  
Michael Ryuji Arai

#### 要約

2001年5月、英国ナショナル・トラスト(The National Trust)が保全管理をする、ロンドン西近郊に位置するオスタリー・パーク・ハウス(Osterley Park House)のイーティング・ルーム(Eating Room)に置かれている豎琴の椅子(Lyre-back Chairs)の細部写真撮影と実測を行った。本稿はその実地調査とその後の文献調査をまとめたものである。

この椅子は、1763-82年の間、オスタリーの当主であったロバート・チャイルド(Robert Child)氏のイーティング・ルームのために、18世紀後半の英国における新古典様式(Neo-Classical Style)を代表する建築家のひとりロバート・アダム(Robert Adam)によって1767年頃にデザインされたものである。そして製作は、ロンドンの家具職人ジョン・リネル(John Linnell)工房によるものと考えられている。

本稿では、イーティング・ルームの豎琴の椅子という一つの家具作品を通して、依頼主、デザイナー、家具職人というこの椅子にまつわる背景、施されている装飾モチーフ、使用されている材料や適用された製作技術、置かれている室内の装飾との調和や室内の用途との関係などについて考察し、18世紀後半の英国家具の現実的な姿を探った。

**キーワード：**オスタリー、ロバート・アダム、ジョン・リネル、新古典様式、英国家具

---

\* 住居学科

## 目 次

- I はじめに (Introduction)
- II 依頼主 (Client)：ロバート・チャイルド夫妻 (Robert & Sarah Child)
  - 1 カントリーハウスとは
  - 2 チャイルド家の歴史概略とオスタリー
  - 3 チャイルド家とロバート・アダム
  - 4 チャイルド家とウィリアム&ジョン・リネル親子
  - 5 第9代ジャージー伯爵がオスタリーをナショナル・トラストへ
- III デザイナー (Designer)：ロバート・アダム (Robert Adam)
  - 1 ロバート・アダム (1728-92) 略歴
  - 2 イーティング・ルームに置かれた豎琴の椅子のデザイン画
- IV 家具職人 (Cabinet-maker)：ジョン・リネル (John Linnell)
  - 1 ウィリアム・リネル (d.1763) とジョン・リネル (1729-96) 親子略歴
  - 2 五つの顧客層
  - 3 四つの情報源
  - 4 イーティング・ルームの豎琴の椅子が製作されるまでの流れ
  - 5 1767 年
- V 装飾モチーフ (Decorative Motifs)
  - 1 豎琴 (Lyre)
  - 2 アンセミオン (Anthemion)
  - 3 パテラ (Patera)／ロゼット (Rosette)
  - 4 溝彫り (Fluting)
  - 5 ハスク (Husk)
  - 6 アカンサス (Acanthus)
  - 7 ローレル・アンド・リボン (Laurel and Ribbon)
  - 8 弓形トップレール (Bow-shaped top-rail)
  - 9 天井と壁の化粧漆喰 (Stucco) 装飾模様と家具の装飾模様との調和
- VI 材料と製作技術 (Materials and Techniques)
  - 1 マホガニー (Mahogany)
  - 2 彫刻 (Carvings)
  - 3 接着剤 (Adhesives: Animal Glues)
  - 4 塗装 (Finish, Polish)
  - 5 三層の積層合板 (Plywood) による背もたれ板 (Splat)
  - 6 深紅のモロッコ・レザー (Crimson Morocco Leather) とボタン留め

- 7 金メッキ真鍮金物 (Gilt Brass Mouldings) と釘 (Nails)
- 8 麻のウェビングテープ (Linen Webbing-tapes)
- 9 その他 ― 補強材、ネジ、詰物、など

## VII 様々な問題点 (Several Issues)

- 1 なぜ竖琴なのか
- 2 なぜ肘掛椅子には竖琴が無いのか
- 3 前脚のデザインについて
- 4 後脚の溝彫りが施された面について
- 5 ダイニングテーブルの問題
- 6 詳細図面はあったのか、試作品はあったのか

## VIII おわりに (Conclusion)

### I はじめに (Introduction)



図1 オスタリー正面

オスタリー・パーク（ハウスとガーデン）は現在、英国ナショナル・トラストの資産として保全管理され、一般にも公開されている。論者がこのカントリーハウスを最初に訪れたのは1990年2月23日であった。ロバート・アダムによる新古典様式の室内装飾の現存する最良の一例に出会えて非常な感動と興奮を覚えた。2001年5月27・

28日、11年ぶりに再訪するきっかけとなったのは、イーティング・ルームに置かれている背もたれに竖琴をあしらった椅子が持つ不思議な魅力だった。

このイーティング・ルームは極めて不思議な空間である。まず、当時は晚餐が行われていたにも関わらずダイニングテーブルが常設されていなかった。そして通常、竖琴の椅子は壁を背



図3 イーティング・ルーム

にして配置されていた。また、豎琴のモチーフがある椅子はすべて肘無であり、肘掛椅子の背は座と同じ革張りである。これらの理由は長年の謎であった。

オスタリーの歴史とハウス各室の装飾的特徴についての概説は、オスタリーの Website に譲ることとする。本稿の pdf ファイルからリンクされているので参照していただきたい。

オスタリーパーク : <http://www.nationaltrust.org.uk/places/osterley/index.html>

オスタリーの歴史 : <http://www.nationaltrust.org.uk/places/osterley/history.html>

ハウス・ツアー : <http://www.nationaltrust.org.uk/places/osterley/house.html>

イーティング・ルーム : <http://www.nationaltrust.org.uk/places/osterley/housetour7.html>

オスタリー・パークの学芸員フィリップ・キング (Mr. Phillip King) 氏にはこの椅子の細部の写真撮影を快く許可してくださったことを、また、この椅子のオリジナルのデザイン画が保存されているサー・ジョン・ソーン博物館 (Sir John Soane Museum) の学芸員スティーブン・アストレー (Mr. Stephen Astley) 氏には文献調査に当たって貴重なご意見を賜ったことを、そして、クリーブ・エドワード博士 (Dr. Clive D. Edwards) には絶版のご自身の著書をお分けいただいたことを感謝申し上げたい。

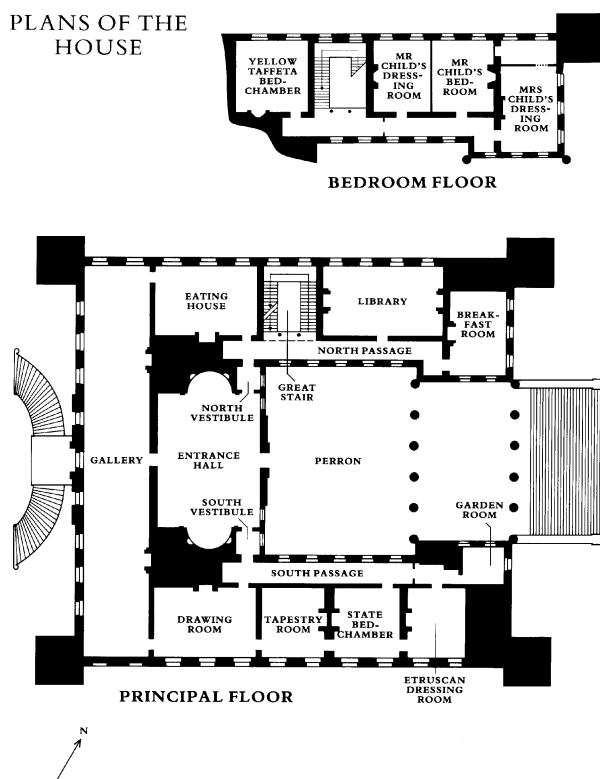


図2 オスタリーの平面図

## II 依頼主 (Client) : ロバート・チャイルド夫妻 (Robert & Sarah Child)

### 1 カントリーハウスとは

カントリー・ハウスとは、主としてエリザベス朝末期の 1590 年代からヴィクトリア女王が即位する 1830 年代までに、その多くは貴族である支配階級の大地主たちが、英国各地に有する広大な所領に建てることを競った豪壮な邸宅のことである。カントリー・ハウスの創建者のほとんどは貴族であるか、のちに貴族に叙せられた人たちであった<sup>(1)</sup>。

### 2 チャイルド家の歴史概略と

#### オスタリー

初代フランシス・チャイルド (Sir Francis Child the Elder : 1642-1713) は 11 人兄弟の 8 番目として 1642 年に生まれ、14 歳

の時、金細工師の工房に丁稚にあがり、1664年、ロバート・ブランチャード（Robert Blanchard）の工房に雇われた。ブランチャードは裕福な未亡人マーガレット・ウィラー（Margaret Wheeler）と結婚し、一人娘のエリザベスが生まれた。彼女と結ばれたチャイルドは、ウィラー家とブランチャード家の全財産を受け継ぐことになった。1681年に事業を受け継いだチャイルドは銀行業に近い事業をしていた。また宝飾品製造も再興し、当時ロンドンで一番の宝飾店となり、国王ウィリアム3世の宝飾師ともなった。1698年にはロンドン名誉市長になり、勲爵士（Knight）の称号を賜り、グリニッジ病院の理事としてサー・クリストファ・ウレン（Sir Christopher Wren）と同席したこともあった。彼は1713年に死去する数カ月前、オスタリーを住まいとしてではなく、ニコラス・バーボンに対する融資の抵当物件回収のため手中に収めた<sup>(2)</sup>。

チャイルド家を継承したのは、長男ロバート（Sir Robert Child：幼児洗礼 1674-d.1721）であった。彼は1714年に勲爵士の称号を賜り、銀行の頭取としてだけでなく、国会議員、クライスト病院の理事長、1719-20年には東インド会社の理事として、様々な業績を残した。そして1720年、チャイルド家としては初めてオスタリーに住むことになったが、1721年に未婚のまま死去した。そして弟である2代目フランシス（Sir Francis Child the younger：1684-1740）が相続することになった。彼は父よりもさらに成功を収め、東インド会社の理事を17年間勤め、1723-24年は金細工師組合の理事長、クライスト病院の理事長でもあった。そして1722-27年は保守党議員に、1731年にはロンドン名誉市長に選出された。翌1732年には勲爵士の称号を賜った。しかし彼も未婚のまま1740年に死去した。ただ一人既婚であった末の弟サミュエル（Samuel Child：1693-1752）が妻と四人の息子連れてオスタリーにやって来たが、この後二人の息子は亡くなっている。1752年サミュエルの死去の時点で残存する長兄の3代目フランシスは未成年であった。彼が成人に達する1756年までオスタリーはサミュエルの妻の預かりとなった<sup>(3)</sup>。

3代目フランシス（Francis Child：1735-63）は高貴で教養に溢れていた。彼はまずブライアン・フェアファックス（Bryan Fairfax）の価値ある多数の蔵書を手に入れた。そしてオスタリーの大改装計画に取り掛かったが、結婚を目前にして1763年9月22日突然亡くなった。そしてその2週間後の10月6日にサラ（Sarah：d.1793）との結婚を控えた24歳の唯一存命の弟ロバート（Robert Child：1739-82）がオスタリーを相続することになった。彼こそが、兄が始めたオスタリーの数多くの室内の大改装を成し遂げた当主であった。彼は建築家ロバート・アダムに各室の装飾の設計と監理をさせ、家具職人ジョン・リネルを用いてそれに相応しい室内調度品を作らせたのであった<sup>(4)</sup>。

ロバート・チャイルド家は、一年のうち6月から11月まで夏季の住まいとしてオスタリーを使用し、12月から5月まではバークレー・スクエア（Berkeley Square）38番地を冬季の住まいとして使用していた。そのロバートの一人娘サラ・アン（Sarah Anne：

1764-93) は、同じパークレー・スクエアに住む第十代ウェストモアランド伯爵 (John, 10<sup>th</sup> Earl of Westmorland : 1759-1841) と 1782 年 5 月 17 日早朝、駆け落ちしてしまう。それを苦にしてロバートは自らの寿命を縮めてしまった。ウェストモアランド家に財産が渡るのを防ぐために書かれたロバートの遺言により、この娘サラ・アンに生まれてくる第二子つまり孫が、チャイルド家の全財産を受け継ぐことになった<sup>(5)</sup>。こうして生まれてきたサラ・ソフィア・フェーン (Lady Sarah Sophia Fane : 1785-1867) は、1793 年 5 月の祖母と、同年 11 月の母の死去により、8 歳にしてチャイルド家の銀行と全資産を相続した。その後 1804 年には、サラ・ソフィア・フェーンは第 5 代ジャージー伯爵 (George Child-

Villiers, 5<sup>th</sup> Earl of Jersey : 1773-1859) と結ばれた<sup>(6)</sup>。そしてその子孫、第 9 代ジャージー伯爵 (George Francis, 9<sup>th</sup> Earl of Jersey : b.1910) が 1949 年、オスタリーをナショナル・トラストに与えた。当初は英国労働省 (現 環境省) が建物の保全を行い、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (The Victoria and Albert Museum: V&A) が運営をした。1991 年以降は、ナショナル・トラストが直接運営するようになり、家具は英国政府が買い上げ、V&A の管理のもと建物内に配置されている<sup>(7)</sup>。

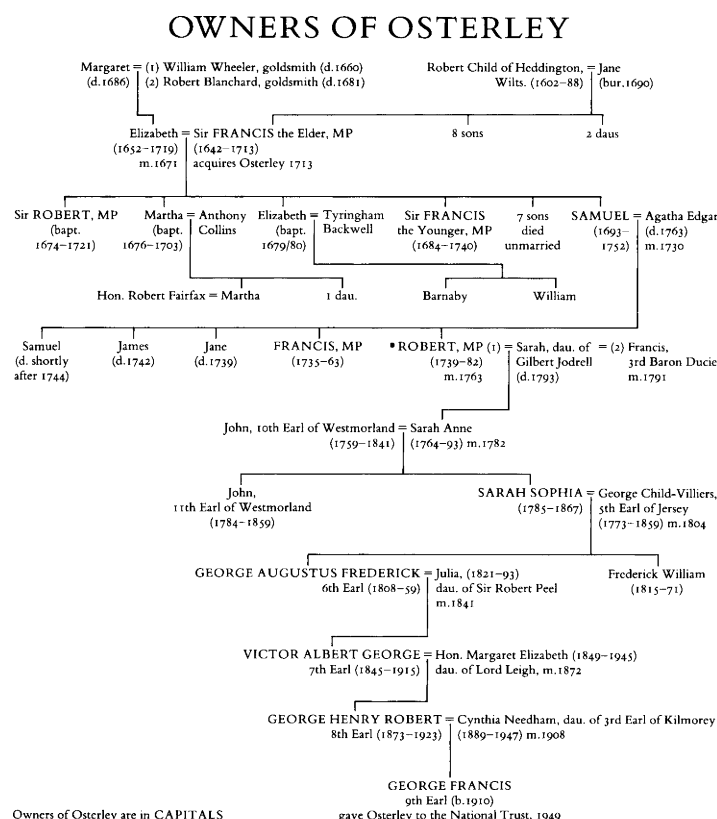


図 4 オスタリーの当主

### 3 チャイルド家とロバート・アダム

3 代目フランシス・チャイルドがサー・ウィリアム・チェンバース (Sir William Chambers) を建築家として用いていたことを示す文書は発見されていない。彼は 1755 年にグランドツアーから戻り、ウェールズ皇太子 (後のジョージ 3 世) の建築教師に任命されていた。ギャラリー (Gallery) などに見るその顕著な様式的特徴から、チェンバースがオスタリーの大改装の初期段階に何らかの関わりを持っていたと考えられている<sup>(8)</sup>。

一方、1758 年にグランドツアーから戻ったロバート・アダムは 1761 年に、3 代目フラン

シスに呼ばれ、オスタリーに斬新なイメージを与えるだけではなく、建物そのもののサイズを縮小するマスタープランを提供するように求められた。1761年にアダムが提案したプランはあまりに過激すぎるアイデアだったので、そのまま採用はされなかったが、その中の幾つかは結局のところ採用された。しかし、1763年9月の3代目フランシスの死去までの間にどの程度作業が進められたかを示す資料は残されていない<sup>(9)</sup>。

1763年の3代目フランシスの死後、オスタリーは新婚のロバートの住まいとなり、兄フランシスが始めた大改装が継続された。1764年には中庭がメインフロア（Principal Floor）の高さに上げられた。1772年の記述では未完成であったが、正面に新たなポーチコ（Portico）を据える工事が始まっていた。そして建物内部の改装に関しては、応接間（Drawing Room）とイーティング・ルームとが最も初期に完成したと考えられている。このため、図書室（Library）は1766年に完成が延ばされ、エントランス・ホール（Entrance Hall）は1767-8年にかけて仕上げられた。1769-71年にかけては、ロンドン中心部パークレー・スクエア38番地のチャイルド邸改装のために、アダムのオスタリーにおける仕事は延期された。1772年以降は、南側の大きくて豪華な居住区の作業に取りかかっている。タペストリー・ルーム（Tapestry Room）、主寝室（State Bedroom）、エトラスカン・ドレッシング・ルーム（Etruscan Dressing Room）の3室は、アダム自身がデザインした家具を含む、アダムの室内装飾芸術の唯一現存する最高傑作である<sup>(10)</sup>。

#### 4 チャイルド家とウィリアム&ジョン・リネル親子

1763年2月にはジョン・リネルの父ウィリアム（William）が亡くなっている。彼の死後に作成されたウィリアム・リネルの財産目録の売掛金債権覧に、『チャイルド氏』“Mr. Child”の名前が見られる。このように、リネル工房は父ウィリアムの代からチャイルド家からの製作依頼を受けていた。この売掛金については、オスタリーのギャラリーに置かれている12脚の肘掛椅子と4脚の長椅子に対するものではないかと考えられている<sup>(11)</sup>。これらの家具は、ロバートの兄であり、オスタリーの前当主であった3代目フランシスの依頼により、サー・ウィリアム・チェンバースがデザインして、ウィリアム・リネルが製作したと考えられている<sup>(12)</sup>。そして偶然にも、1763年9月には3代目フランシスも亡くなった。リネル工房は息子ジョンの代になり、オスタリーは弟ロバートの代になったが、引き続きチャイルド家はリネル工房を使用し続けることになった。

#### 5 第9代ジャージー伯爵がオスタリーをナショナル・トラストへ

チャイルド家の血を引く第9代ジャージー伯爵はオックスフォード大学卒業後、夏の間オスタリーに住みながら、チャイルド銀行で働き始めた。ところが、交友関係者から毎週末ごとにオスタリーを見せていただきたいとの申し出があった。そしてご自身が学芸員ま

たは案内者のようにハウスを案内したのであった。そしてとうとう1939年の復活節にハウスを一般公開するに至った。間もなく第二次世界大戦が始まり、戦中オーストリアは、チャイルド銀行の支店の一つとして利用された。終戦後になると、オーストリアのようなハウスに住むことは非実用的であることが次第に明らかになってきたので、ジャージー卿は1949年ハウスとパークをナショナル・トラストに与えることにした。ナショナル・トラストとヴィクトリア・アンド・アルバート博物館によって保全管理されているオーストリアを訪れたジャージー卿は、かつてご自身が住まわれていた頃の博物館的雰囲気は失われてしまったが、1760年代の新婚のロバートとサラのために、ロバート・アダムが新しくデザインした頃のロマンティックで生活感があるオーストリアを気に入っておられた<sup>(13)</sup>。

### III デザイナー (Designer) : ロバート・アダム (Robert Adam)

#### 1 ロバート・アダム (1728-92) 略歴

ロバート・アダムは1728年7月3日、スコットランド人建築家ウィリアム・アダム (William Adam : 1689-1748) の残存する次男として生まれた。アダムはエジンバラ高等学校と大学で教育を受け、兄ジョン (John Adam : 1721-92) と弟ジェームス (James Adam : 1732-94) と共に父の設計事務所で訓練を受けた。父ウィリアムは当時のスコットランド建築界の指導者的存在で、その様式はバンバラ、ギブス、英国風パラディオ様式を基調としたものであった。父の死後、ジョンとジェームスと共に設計事務所を続けたアダムは、1754年10月に建築を中心としたグランドツアー (Grand Tour) に出かけた<sup>(14)</sup>。

当時イギリスの貴族の間では子弟を大陸に遊学させることが流行した。彼らはまずフランスに滞在して貴族から美しいフランス語と優雅な作法や身のこなしを習い、次にイタリアで古代ローマやルネッサンスの美術に対する審美眼を養った。彼らは多くの絵画、彫刻、骨董品などを買い集めて自国に持ち帰った。

フィレンツェでアダムはフランス人、シャルル・ルイ・クレリッソー (Charles-Louis Clerisseau : 1721-1820) に会う。そしてローマではクレリッソーの指導のもと、古代遺跡の研究に打ち込んだ。1755年、アダムはクレリッソーと共にナポリとハーキュレーニウムを訪れた。そこでアダムは、紀元79年にヴェスビウス火山の噴火に埋もれた紀元1世紀のローマ時代の建築と町並みの発掘に出会う。また、アダムはローマ人画家ピラネージとの親交を確立した。1757年にローマを去ったアダムは、骨董品や絵画などの収集物だけでなく熟達した製図技術と建築と室内装飾の最新の理論と実践を身につけていた<sup>(15)</sup>。

1758年1月にロンドンに帰ったアダムは自身の建築事務所を構えた。1760-63年にクレリッソーと共に同じようなグランドツアーに出かけた弟のジェームスも、後にこのアダムの事務所に加わった<sup>(16)</sup>。アダムのデザインは、バロックやロココの度を過ぎた豪華さから



離れて、『高貴な簡素さと穏やかな優雅さ』のある軽やかな幾何学的なものになっていった。考古学的に正確でない古典模様は退けられ、正確な古典模様を幾何学的に、すなわち、直線・半円・楕円状に配置していった。彼のスタイルは非常に新鮮な驚きをもって受け入れられ、英国全土に広がっていった。

アダムは王立協会 (Royal Society) の特別研究員 (Fellow) になり、サー・ウィリアム・チェンバースと並んで、英国王室に対する最初の建築家に任ぜられた<sup>(17)</sup>。アダムは 18 世紀後半の最も偉大な建築家の一人であるばかりか、最も有能な室内装飾家、家具デザイナーであった<sup>(18)</sup>。アダムの代表的な建築と室内装飾の作品は次のようなものであった。ハーウッド・ハウス (Harewood House 1758-71)、ケドルストン・ホール (Kedleston Hall 1758-71)、サイオン・ハウス (Syon House 1760-69)、オスタリー・パーク・ハウス (Osterley Park House 1761-80)、ルートン・ホー (Luton Hoo 1766-71)、ノステル・プライオリ (Nostell Priory 1766-70)、ニュービー・ホール (Newby Hall 1767-85)、ケンウッド (Kenwood 1767-69)、ソルトラム (Saltram 1768-69)、アデルフィ (Adelphi 1768-72)。このアデルフィの事業の失敗後、アダムの仕事の質は急激に低下していった。しかし、彼の生涯最後の 10 年間は、エジンバラでの大きな設計業務の委託によって業績の回復を見た。1780 年頃以降、アダムは主にスコットランドの仕事に集中していた。そしてそれまでのアダムの事務所の仕事は、ジェームス・ワイアット (James Wyatt) が受け継ぎ、1792 年 3 月 3 日のアダムの死後も、1794 年までロンドンの事務所を運営した。アダムの図書資料と収集物と 9000 枚近くの図面とは、サー・ジョン・ソーンが 1833 年のオークションで購入した<sup>(19)</sup>。これらは、今日でもサー・ジョン・ソーン博物館に保管されている。

## 2 イーティング・ルームに置かれた竪琴の椅子のデザイン画

アダムが描いたイーティング・ルームに置かれた竪琴の椅子のオリジナルデザイン画は、現在サー・ジョン・ソーン博物館に資料として保存されている (Vol.17, No.93; pl. C/1A)。そこには、『ロバート・チャイルド様のための椅子』“Chair for Robert Child Esq.” と明記されている。作画年代は不明であるが、1767 年頃と考えられている<sup>(20)</sup>。(図 5、図 6)

また、オスタリーのイーティング・ルームに置かれたサイドボードのためのアダムによるデザイン画には次のように明記されている。『ロバート・チャイルド様のための、オスタリー、イーティング・ルームに置かれるサイドボードのテーブル・フレーム・デザイン』“Design of a Table Frame for the Side Board in the Eating Room at Osterly for Robert Child Esq.” 併せて 1767 年とも明記されている<sup>(21)</sup>。(図 8) そして、別のアダムの彫版印刷 (Engraving) には、サイドボード、壺と台座と一緒に描かれている<sup>(22)</sup>。(図 9) よって、壺と台座のデザインもサイドボードと同じ 1767 年と考えられる。

ところで、家具職人ジョン・リネルは同じ家具デザインを複数の顧客に勧めていたよう

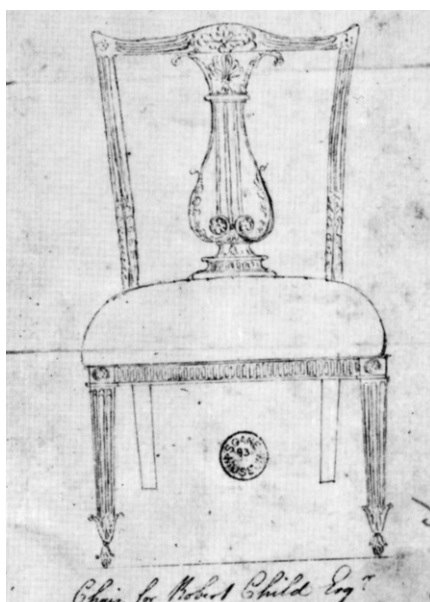


図5 アダムによるイーティング・ルーム  
 竖琴の椅子のデザイン画



図6 イーティング・ルーム竖琴の椅子（正面）



図7 イーティング・ルーム竖琴の椅子（背  
 面）、壺と台座

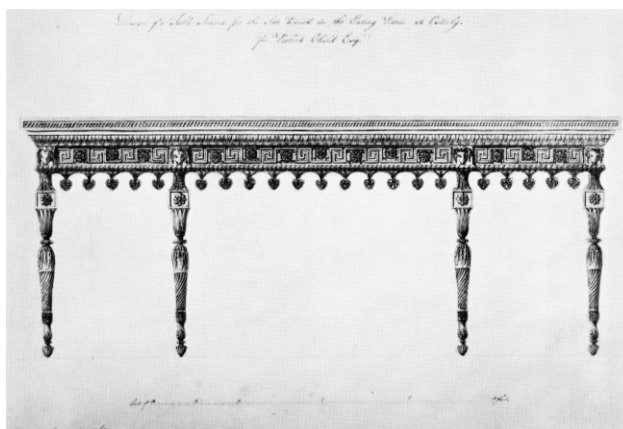


図8 アダムによるイーティング・ルームのサイドボードの  
 デザイン画（1767）



図9 アダムによるサイドボード、壺と台座などの彫版印刷

である。幾つかの例が知られている<sup>(23)</sup>。このことは、オスタリーのイーティング・ルームのための竖琴の椅子がジョン・リネル作とされる理由に深く関係している。

ジョン・リネルがウィリアム・ドレーク（William Drake）氏のバッキングハムシャー、

シャルデロース (Shardeloes) のダイニングルームに納めた、オスタリー、イーティング・ルームのもの (図7) と酷似したデザインの壺 (Urns) と台座 (Pedestals) (図10) に対する 1767 年 10 月 2 日付けの請求書には『チャイルド氏のように』“Like Mr. Child” と記されている<sup>(24)</sup>。そして、この 1767 年の請求書には、『マホガニー材のハープ・バック肘掛椅子 2 本、5 ポンド 10 シリング』“2 Mahogany elbow chairs with harp-backs. £5:10:0” と記されている<sup>(25)</sup>。実は、ウィリアム・ドレーク氏のシャルデロースのダイニングルームは 1761 年にアダムがデザインしたものであり、オスタリーのイーティング・ルームのためのアダムのデザインと非常に近い関係があったとされている<sup>(26)</sup>。

これらのことから推測されるのは次のことである。ジョン・リネルは 1767 年に、まずオスタリーにアダムがデザインしたサイドボード、壺と台座、そして豎琴の椅子を製作して納品した。次に、非常に似通ったデザインの壺と台座、ハープ (豎琴) の肘掛椅子をシャルデロースに納品した。よって、オスタリー、イーティング・ルームのために描かれた豎琴の椅子の作画年代は 1767 年頃との結論に達する。



図10 ジョン・リネル作のシャルデロースの壺と台座(1767)

#### IV 家具職人 (Cabinet-maker) : ジョン・リネル (John Linnell)

##### 1 ウィリアム・リネル (d.1763) とジョン・リネル (1729-96) 親子略歴

ジョン・リネルは彫刻師であり家具職人であったウィリアム・リネルの第一子長男として 1729 年に生まれた。父ウィリアムはセント・ポウルズ・チャーチヤード (St Paul's Churchyard) の家具工房にて 1717-24 年にかけて彫刻師として働き、1729-30 年頃にはセント・マーチンズ・レーン (St Martin's Lane) 近くに自分の工房を開いた。この地域には当時の有名な家具職人たちが集まっていた。1753 年 12 月にはトーマス・チッペンデール (Thomas Chippendale) もセント・マーチンズ・レーンに引っ越して来たのであるが、ウィリアム・リネルは翌 1754 年にパークレー・スクエア 28 番地に移り住み、そこに新しい工房を構えることになった<sup>(27)</sup>。

ジョン・リネルは、ウィリアム・ホガス (William Hogarth) が 1735 年に創設したセント・マーチンズ・レーン・アカデミーにおいてデザインを学んでいる<sup>(28)</sup>。彼はパークレー・スクエアに引っ越す以前の 1750-53 年ころには、すでに父ウィリアムと一緒に働いていたと考えられている<sup>(29)</sup>。1763 年 2 月の父ウィリアムの死去にあたって財産目録が作成された

が、その時すでにバークレー・スクエアの工房には、『ジョン・リネル氏の製図室』“Mr. John Linnell's Drawing Room”という部屋があり、家具およびインテリアデザイン面で父ウィリアムを助けていたことが知られている<sup>(30)</sup>。1763年の財産目録から知り得るバークレー・スクエア28番地のリネル工房には、ジョンの製図室の他に、指物部門（Joiner's Shop）、箱物部門（Cabinet Shop）、椅子部門（Chair Shop）、彫刻部門（Carving Shop）、金箔部門（Gilding Shop）、椅子張り部門（Upholstery Shop）、ガラス部門（Glass Shop）、在庫室（Store Room）が存在していた<sup>(31)</sup>。34歳で父の工房を受け継いだジョンは、40～50人くらいの職人を雇っていたと考えられている<sup>(32)</sup>。

現存するジョン・リネルのデザイン画から、ロバート・アダムと仕事をする以前の彼はバロック様式、ロココ様式の家具をデザインしていたことが伺える<sup>(33)</sup>。ところが、アダムのデザインによるオスタリー、イーティング・ルームのサイドボード、壺と台座、豎琴の椅子を製作したこと、新古典様式の新しい息吹がジョンのデザインに吹き込まれた。このことは、その後のジョンのデザイン画からも知ることができる<sup>(34)</sup>。

ジョン・リネルは1793年64歳で引退し、1796年67歳で世を去るまでの晩年はバース（Bath）で過ごした。倒産こそしなかったが、多くの財産を残すことはなく、負債も負っていたようである。また、後継ぎがいなかったこともあり、工房自体も閉鎖された。しかし、ジョンが工房で家具職人として訓練した母方の従兄弟の子であるトーマス・タッサム（Thomas Tatham）は家具職人としてのリネル家族の伝統を引き継いだ。更に、ジョン・リネルのデザイン画集は遺言によりトーマスが受け継ぎ、後にトーマスの兄弟、チャールズ・ヒースコート・タッサム（Charles Heathcote Tatham）が受け継ぐことになった<sup>(35)</sup>。

18世紀英国の家具工房のオーナーは、デザイナーであると同時に企業家であった。ジョン・リネルとトーマス・チップendaleはその成功した例である。家具工房が専門的なデザイナーを常用扱いで雇用し始めたのは、19世紀になってからである<sup>(36)</sup>。

## 2 五つの顧客層

リネル工房の顧客は大きく五つに分類される。第一は英国王室関係者である。ただしジョージ2世、3世の仕事を請け負ったという証拠は残されていない。第二は英国貴族、大地主、銀行家である。少なくとも公爵10家、伯爵20家程度、その他大勢の子爵、男爵、准男爵が顧客であった。大地主の中ではウィリアム・ドレーク氏、銀行家では、リチャード・ホアレ（Richard Hoare）氏とチャイルド氏が上得意であった。第三は中産階級の資産家、聖職者、専門家、既婚・未婚のご婦人方である。第四は病院などの公共機関であり、第五は建築業者や流通関係者であった<sup>(37)</sup>。

### 3 四つの情報源

リネル親子の工房の活動に光を投げかける情報は次の四通りである。第一は現存する家具または彫刻、第二はヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に保存されている 350 点以上のジョン・リネル自身によるデザイン画と工房による図面である。第三は 1763 年のウィリアム・リネルの死去に伴う在庫、材料、道具の財産目録である。第四は 1739-95 年の間に工房が発行した請求書と顧客との間の通信の断続的な記録である。ただし 1765-96 年の間の請求書などはほとんど残されていない。よってこの間は、一部の資料によってリネル作とされる現存家具、ジョン自身のデザイン画と工房の図面に頼るしかない<sup>(38)</sup>。

### 4 イーティング・ルームの竖琴の椅子が製作されるまでの流れ

ジョン・リネルはある時は建築家のデザインに従って家具を製作し、ある時は自身のデザイン画を顧客に直接示して家具製作をしていた。それでは、イーティング・ルームの竖琴の椅子が製作されるまでにはどのような流れがあったのだろうか。

まず、アダムによって描かれたイーティング・ルームの家具のデザイン画がロバート・チャイルドに示され、チャイルドはそのデザインの承認をアダムに与えた。そしてアダムは、このデザイン画を元にジョン・リネルと打合せを行ったと考えられる。そして、サイドボード、壺と台座などの家具と共に竖琴の椅子が製作されて、オスタリーに納品された。ジョン・リネルが直接ロバート・チャイルドに家具代金を請求したのか、ロバート・アダムの建築事務所を通したのか、記録が欠如しているため詳細は不明である。いずれにしても、アダムが描いた上記の家具のオリジナル図面は、アダムの手元に残ったため、現在もサー・ジョン・ソーン博物館の資料として保存されている。

### 5 1767 年

1767 年は、竖琴の椅子がロバート・アダムによりデザインされ、ジョン・リネルによって製作されたとされる年である。この年、ジョン・リネル (1729-96) は 38 歳、ロバート・アダム (1728-92) は 39 歳で、二人の年齢差はわずか 1 歳であった。二人とも 30 歳代後半のベテランだった。ところが初代トーマス・チップendale (Thomas Chippendale, The Elder: 1718-79) は 49 歳でアダムより 10 歳年上、2 代目トーマス・チップendale (Thomas Chippendale, The Younger: 1749-1822) は 18 歳で、ちょうど父の工房で働き始めたばかりであった。ジョン・リネルとロバート・アダムとの間に個人的な親交があったという確たる証拠は見つかっていない。また、どのようにアダムとリネルがビジネス上の関係を築き始めたかは定かではない。しかし、リネルがアダムのデザインから実際に製作するという一連の作業を通して、二人の間に相互の深い尊敬が深まっていったであろうと推察される<sup>(39)</sup>。特に彼らがほぼ同年であったことは興味深い。



この年もう一つ興味深いことが起こった。ロバート・チャイルド氏がリンカンズ・イン・フィールド（Lincoln's Inn Field）を売却して、バークレー・スクエア 38 番地を冬季の住まいとして購入したのである。またこの年には、パリで修行した二人のスウェーデン人家具職人をジョン・リネルが雇っている。フランス風の突板張り寄木象嵌（Marquetry）を表面の化粧に用い、併せて、金メッキされた真鍮金具で表現された装飾模様（Ormolu）を家具の飾りに用いるスタイルは、彼らがリネル工房にもたらしたと考えられている。オスタリーの図書室用のデスクと竖琴の椅子にその特徴が見られる。バークレー・スクエア 38 番地のチャイルド氏の住まいから、28 番地のリネル工房までは、ほんのひと歩きの距離であった。チャイルド氏が頻繁にリネル工房を訪ね、フランスの新古典様式の家具という斬新なものに触れ、図書室用にはこの技法の家具を注文したのではないかと考えられている<sup>(40)</sup>。

## V 装飾モチーフ（Decorative Motifs）

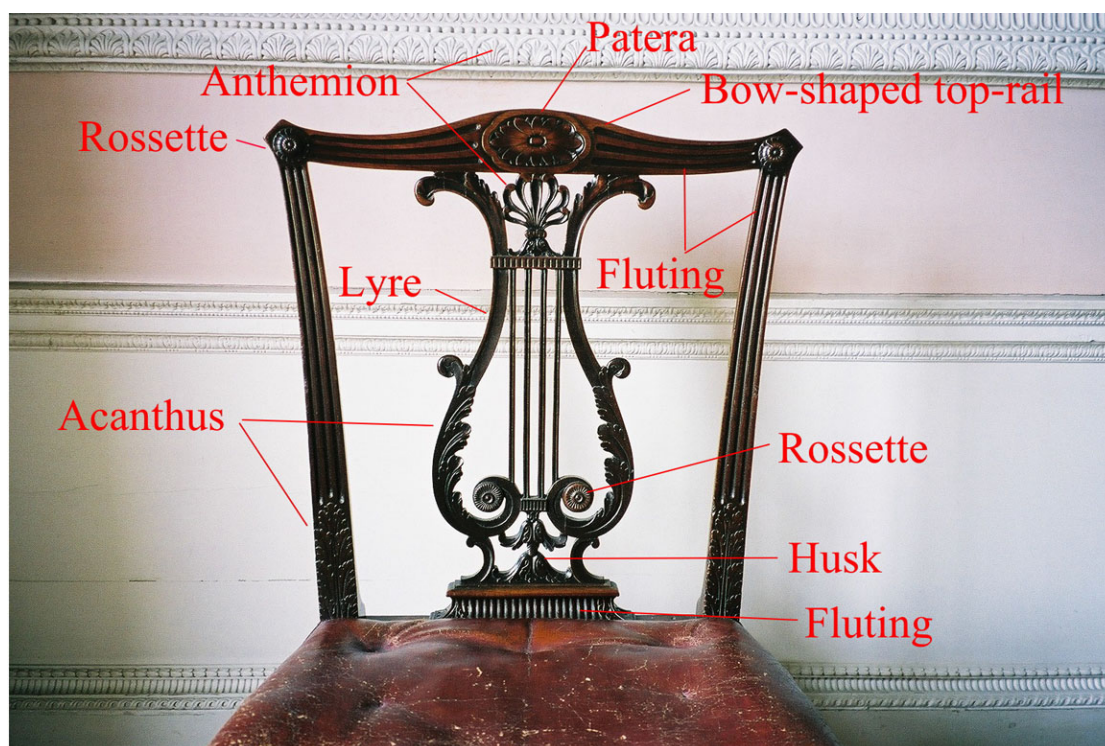


図 11 竖琴の椅子の背部

### 1 竖琴（Lyre）（図 5、図 11）

竖琴は古代ギリシャ時代の楽器であり、主に新古典様式の家具の装飾モチーフとして多く見られる。この竖琴は S 字に曲がった動物の角のような形のフレーム 2 本 1 組を線対称に向かい合わせ、その上下垂直方向に弦を張ったものである<sup>(41)</sup>。古代の竖琴に対する、楽

器としての、または装飾モチーフとしてのフランス人の興味は、1760 年代イギリスにおける豎琴の椅子の発展を鼓舞したと考えられている。しかし、当のフランスではこの後のエンパイア／アンピール様式の時代にこそ豎琴のモチーフが広く流行した<sup>(42)</sup>。尚、アダムデザイン画に描かれた豎琴の弦は 3 本であったが、リネルはこれを 4 本にしている。

## 2 アンセミオン (Anthemion) (図 5、図 11、図 12)



図 12 右肩部詳細

アンセミオンとはギリシャ語で花を意味し、かつてはコーニスやイオニア式柱頭の首の部分などに巻きつけられた建築的華飾のことであった。このモチーフは 18 世紀後半の建築と室内装飾によく見られる。アンセミオンはギリシャ建築において水平方向に連続

して用いらただけであったが、新古典様式建築では上下にも配置されて用いられた。この豎琴の椅子の背面の壁にあるパネル状枠には水平方向にアンセミオンが見られるが、パネル状枠内にはアンセミオンが上下に配置されてレリーフされている。また、中央に向かって閉じている形のはスイカズラの花 (Honeysuckle) を表すとされている<sup>(43)</sup>。アダムが多く使用したモチーフの一つである。

この豎琴の椅子における構造上の問題点は、中央の背もたれ板 (Splat) としての豎琴と椅子の背のトップレールとを何らかのモチーフで繋いで強度を出す必要があったことである。この位置にアダムはアンセミオンを持ってきた。そして、背もたれの強度と共に、室内の壁面の装飾との一体感を出すことに見事に成功した。

## 3 パテラ (Patera)／ロゼット (Rosette) (図 5、図 11、図 12、図 23)

パテラとは平たい円形または楕円形の装飾模様で、中央に定型化されたバラなどの花模様、アカンサスの葉模様、放射状の幾何学的に区分された模様などが使用されているものを指す。特に定型化されたバラの花模様を持つ円形または楕円形の装飾模様をロゼットと呼ぶ。1760 年から 1830 年にかけての銀製品や家具に多く見られた<sup>(44)</sup>。18 世紀のパテラはほぼいつもロゼット状のものにデザインされたことから、二つの呼び名は置換え可能なも

のとして使用されている<sup>(45)</sup>。

この豎琴の椅子には3種類のパテラが見られる。まず、第一種として、トップレールの中央に楕円形状の大きなパテラが見られる。花模様のように見受けられるが、バラの花ではないようである。アダムのデザイン画からは花びらと認識できるが、実際にリネル工房で彫刻されたものはもう少し抽象化されたものになっている。(図12)

次に第二種として、左右の背柱とトップレールとの連結部分、すなわち肩の部分に、盛り上がったロゼットが左右各々一つずつ彫刻されている。これは、中央部分から周囲に向かってなだらかに傾斜している断面を持つバラの花模様のロゼットである。アダムのデザイン画のその部分は花びらそのものであるが、これもリネルによって美しく抽象化された。

そして、第三種として、座枠と前脚との連結部分の正面と側面の2面に、中央部分が凹んだバラの花模様のロゼットが彫刻されている。(図23) 座枠と後脚との連結部分には椅子側面にだけ同様のロゼットがあり、椅子の背面には見られない。(図25) また、同様のロゼットは、若干形が異なるが、豎琴のモチーフ自体にも左右各々一つずつ見られる。アダムのデザインによる豎琴のこの部分には肩の部分と同じ花びらが見られるが、リネルは座枠と同様のロゼットを当てはめている。(図5、図11、図13)

さらに、イーティング・ルームの天井の中央にも大きなパテラが見られる。パテラやロゼットもアダムが多く使用した装飾モチーフの一つである。

#### 4 溝彫り (Fluting) (図5、図11、図12、図13、図14、図23、図24、図25)

浅い半円の断面を持つ垂直方向に並行した溝彫りは、元々古典(ギリシャ・ローマ)建築の柱や付け柱の表面に施された装飾である。18世紀後半の新古典様式においては家具職人が家具の装飾に取り入れ始めた<sup>(46)</sup>。



図13 背の左下部詳細

この豎琴の椅子の前脚に施された溝彫りは、テーパーをかけて先端を細くした脚をさらに細く見せるための視覚的効果を合わせ持っている。同様に後脚の2面にも溝彫りがなされている。これは左右の背柱の上部から続く3本の溝彫りの延長と考えられる。この後脚の溝彫りが施された面に



については第七章第4節にて詳しく考察する。また、トップレールのパテラの左右にも水平方向に3本の溝彫りがなされている。そして、座枠の前面、左右側面の三方にも、高さは低いが、同様の溝彫りがされている。さらに豎琴の台座にも同様の溝彫りが施されている。実際のこの椅子の総重量はかなりのものだが、溝彫り装飾の効果で、全体として軽やかなイメージを出すことに成功している。

この溝彫りは、新古典様式の特徴である『高貴な簡素さと穏やかな優雅さ』を表現するのに最も有効な装飾技法のひとつである。尚、隣の壺と台座にも溝彫りが見られる。(図7)

## 5 ハスク (Husk) (図5、図11、図13)

ハスクとは釣鐘草の花のようなモチーフが垂直方向に連なったもので、下に行くほど花模様の大きさが小さくなっていくものが多い<sup>(47)</sup>。この椅子では豎琴のモチーフの下部に2連のハスクが見られる。2つの花模様の大きさに変化は見られない。豎琴の上部にあるアンセミオンと同じく、この2連のハスクは背もたれ板としての強度を増すためにこの位置に入れられたと考えられる。

## 6 アカンサス (Acanthus) (図5、図11、図13)

アカンサスとは、地中海地方産ハアザミ属の植物の総称である。古典建築のコリント式柱頭やコンポジット式柱頭にアカンサスの葉飾りが見られる。18世紀バロック様式、ロココ様式、ネオ・クラシカル(新古典)様式、リージェント様式にもこのアカンサスが多く見られる<sup>(48)</sup>。この椅子の場合、背柱の正面に座面から生え出すようにアカンサスの葉飾りが彫刻されている。アダムデザインに見られるアカンサスは背柱中央まで伸びているが、リネルはそれを低くして、返って溝彫りを長くしているため、溝彫りの効果が有効に現れ

ている。また、豎琴そのものにもアカンサスの葉飾りが見られる。



図14 座左側面

## 7 ローレル・アンド・リボン (Laurel and Ribbon) (図14、図23)

月桂樹の葉を重ねたものをリボンが束ねるといふデザインが、金メッキされた真鍮金物に施され

ている。月桂樹で編んだ冠は、ギリシャ・ローマ時代には勝利を意味した。この月桂樹のモチーフが新古典様式の建築と室内装飾において再び取り上げられ、突起状輪郭(Mouldings)の表面を飾る装飾モチーフとして利用された<sup>(49)</sup>。アダムデザインでは、座枠自体がフリーズに見立てられて溝彫りされている。そしてこのフリーズの上下に突起状輪郭が見られる。リネルは下側を木材で、上側を金メッキされた真鍮金物にした。真鍮金物そのままでは見栄えがしないので、表面にローレル・アンド・リボンのモチーフをあしらったと考えられる。

## 8 弓形トップレール (Bow-shaped top-rail) (図11、図15)

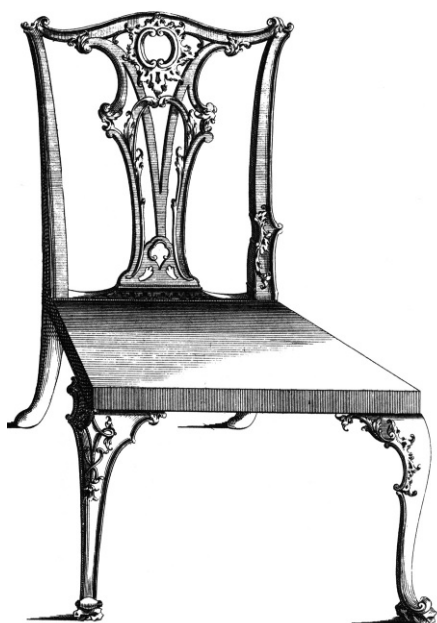


図15 チップンデール・チェア

図15は、トーマス・チップンデールの『紳士と家具職人のための指導書』初版1753年、第2版1761年、第3版1762年(The Gentleman & Cabinet-Maker's Director)の図版からの一例である<sup>(50)</sup>。この図の弓形をした背のトップレールのデザインがチップンデール・チェアの特徴の一つである。アダムが1767年頃デザインしたイーティング・ルームの竖琴の椅子にも同じような弓形のトップレールが採用されている<sup>(51)</sup>。チップンデールが先に発行した書籍の影響か、実際にチップンデールが製作した作品をアダムが見て影響を受けたのか定かではないが、形状の上では極めて類似していることが認められる。

## 9 天井と壁の化粧漆喰(Stucco)装飾模様と家具の装飾模様との調和 (図3、図11)

イーティング・ルームの天井と壁は、淡く明るい色調のピンクとグリーンとホワイトの化粧漆喰細工で装飾され、大小数点の絵画が埋め込まれている。天井と壁ではピンクとグリーンの分量が逆転していることがわかる。

この化粧漆喰で表現されている装飾模様を詳しく観察してみる。天井には、ぶどうの蔓による花輪飾りの中心にワイン用の水差しが見られる。また、壁面にあるパネル状枠内にはアラベスク模様があしらわれ、アカンサスやアンセミオンが見られる。壁面を背にして配置された竖琴の椅子に施された装飾モチーフと重複するものが数点見られる。

サイドボードの上の壁面に埋め込まれた絵画は、アントニオ・ツッキ(Antonio Zucchi: 1726-95)によるもので、『古代の廃墟のなかで踊るトルコ人たち』である。反対側の壁には、『廃墟のローマ風呂の中で運動する人物たち』が描かれている。いずれも1767年のツッ

キの作とされている。そして、暖炉の上の絵画は、ジョバンニ・バティスタ・キプリアーニ (Giovanni Battista Cipriani : 1727-85) による『ケレスへの奉納』である。ケレス (Ceres) とはローマ神話の豊穡の女神である。女性たちと子どもたちがケレスの像に向かって犠牲を捧げ、豎琴を奏でている女性の演奏に合わせてケレスを讃える歌を歌っている様子が描かれている<sup>(52)</sup>。しかし、この絵画の中の豎琴は簡素な形のものである。

## VI 材料と製作技術 (Materials and Techniques)

### 1 マホガニー (Mahogany)

マホガニー材は硬く重く耐久性のある木材である。この材料は家具製作に適し、無垢材 (Solid) のままでも突板 (Veneer) にしても理想的な材料である。また大きなサイズの板材としての入手が可能であった。18 世紀初頭から英国家具産業界で使用され出し、当初はジャマイカ産のものが主流であった。そして 1740 年代後半までに西インド諸島、キューバ、ホンジュラス、メキシコなどの国々から輸入されるようになった。その後 19 世紀には西アフリカから輸入されたが、今日ではマホガニーの保護のために輸入が困難になっている<sup>(53)</sup>。

この椅子に使用されたマホガニー材はキューバ産マホガニーとされている<sup>(54)</sup>。製材されたばかりは明るい赤色であるが、露出されることによって深みに富む暗い色に変化する。最初に英国に輸入されたのは 1760 年代初めであった。1793 年にはマホガニー材の 17.5% がキューバ産であった。ホンジュラス産よりも硬く、椅子用の木材として適していたことが知られている<sup>(55)</sup>。

### 2 彫刻 (Carvings)

18 世紀英国家具にはバロック、ロココ、ネオ・クラシカルの様式を問わず、多くの彫刻が見られる。この椅子に施された装飾模様も、ほとんどが彫刻によって形成されている。

模様の部分が周りの面よりも浮き上がるように彫刻する方法が浮き彫り (レリーフ : Relief) である<sup>(56)</sup>。ロゼット、パテラ、ハスク、アカンサスなどは皆、このレリーフ技法によって彫刻されている。立体的な模様には陰影が生じるので装飾模様に深みを与える。

次に、ある部分を材料の背面まで貫通して彫る技法を透かし彫り (Pierced) という。アンセミオンの花びらの隙間空間や豎琴のフレームと弦の間の空間は、透かし彫りの技法により作られている。透かし彫りはモチーフ全体を軽やかに見せる効果がある<sup>(57)</sup>。

溝彫りは半円形の断面を持つ溝を平行に彫る技法である<sup>(58)</sup>。その視覚効果については第 V 章で説明した。

### 3 接着剤 (Adhesives: Animal Glues)

家具製作に当たって接着剤は重要な材料の一つである。歴史的に見て、接着剤は大きく次の3種類に分けられる。動物性接着剤(Animal Glues)、合成接着剤(Synthetic Glues)、植物性接着剤 (Vegetable Glues)。これらのうち古くから世界的に使用されていたのは動物性接着剤である。この接着剤は煮沸した動物の骨、あら皮、血液、内臓などを固めたものである。この塊を熱することによって液状化して、フレームの組立、突板張りなどに使用された。最終的に固まるまでには24時間程度を必要とした。この接着剤の利点は、温めるとその接着力がよみがえることである。動物性接着剤は骨から作られるものと、あら皮から作られるものとに細分されるが、ロンドンの家具職人は両方の接着剤を使用していた<sup>(59)</sup>。尚、木材は経年で縮小していく傾向があるので、椅子フレームの強度はただ単に接着剤の強度だけで決まるものではない。

### 4 塗装 (Finish, Polish)

塗装は木材を保護膜によって保護し、またその美しい木目を強調し、かつ着色などで装飾するための大切な技術である。西欧諸国では16世紀後半以降、東洋の漆塗りに対する非常な興味が沸き起こった。しかし、輸入された本物の漆塗り製品の数量は需要に見合うものではなかった。また、天然の漆の樹脂は西洋では入手困難であったので、東洋の漆塗りを真似た技法が開発された。すでに17世紀後半までに英国とイタリアで漆の代用品が開発されていた。しかし1730年にフランスのマルタン兄弟が開発した擬似漆“vernis Martin”が英国家具産業界に大きな衝撃を与え、ロンドンの商工業者を奨励してフランスの擬似漆に優るものを開発させた。結局1763年にスチーブン・ベッドフォード (Stephen Bedford) が優秀賞を受賞した<sup>(60)</sup>。

このようなロンドンの家具産業の背景から、この堅琴の椅子の塗装には当時開発された英国製の擬似漆が使用されたものと考えられる。先述の通り、マホガニー材は元々明るい赤色であるが、この椅子はほぼ真っ黒に着色されていた。背面の画像(図17)から判るように、経年のためこの塗装が色褪せて木地の明るい色が見えるようになってきている。

尚、フランス式艶出 (French Polishing) によって最終仕上げ段階で艶を出す技法が英国に導入されたのは、およそ1815年以降であった<sup>(61)</sup>。

### 5 三層の積層合板 (Plywood) による背もたれ板 (Splat) (図16、図17)

積層合板とは木目方向が直角に交差するように薄い板を何枚か積層して作るものである。積層合板は無垢材よりも強固で、また弾力性にも優れている。この技法は18世紀中ごろまでに確立されていた。家具職人は通常、三層の積層合板でコーヒータブルの天板を囲む透かし彫り模様を製作していた。また、椅子の背もたれ板にも三層のマホガニーの積



図 16 背もたれ積層合板（正面）

層合板が用いられていた<sup>(62)</sup>。

まさにこの豎琴の椅子の背もたれ板がそれである。特にこの豎琴のモチーフのように曲線的なデザインの場合、無垢材であれば木目方向によっては欠損してしまう。しかし、下層の木目が上層の木目と直角に交差しているので、たとえ表面が欠けてもその部分が

全部割れてしまうことはない。実際この豎琴のモチーフは表裏とも縦方向にかなり割れているが、原型を留めている。これが三層の積層の効果である。

また、背もたれ板にはある程度の弾力性が必要である。特にこの豎琴のモチーフのように繊細なデザインの場合、積層合板が持つ弾力性が非常に重要である。これが家具職人の知恵である。尚、ハンス・ウェグナーのY-Chairの背もたれ板も3層の積層合板である。



図 17 背もたれ積層合板（背面）

## 6 深紅のモロッコ・レザー(Crimson Morrocco Leather)とボタン留め(図 18、図 20)

革とは動物の毛と脂肪がついた牛、羊、山羊などのあら皮をなめして脱毛脱脂したものであり、通常は着色される。表面は乳頭層と呼ばれ、毛穴や皮膚のシワによる天然のシボが表れる。下部は網状層と呼ばれ、主に脂肪層である。この椅子の革は元々深紅であったが、経年劣化のため色褪せた茶色になっている。所々網状層が露出しているところがあり、耐久年数的にはすでに限界を迎えている。

1782年にロバート・チャイルド氏死去に伴って作成されたオーストリーの財産目録には、モロッコ・レザーとの記述が見られる<sup>(69)</sup>。モロッコ・レザーとは、ウルシ属の木の葉を乾





図18 座面のモロッコ・レザーにボタン留めの跡

乾燥したものをを用いてなめした赤色の山羊の革である。元々この革はモロッコから英国に入ってきた。18世紀の家具では、デスクトップや椅子の座に使われた。その耐久性と色の定着性のため、19世紀には高品質の革の代名詞であった。しかし20世紀に入ると、モロッコ・レザーほど耐久性は

ないが、より安価でより大きくより入手しやすい牛革が、1914-18年以降の革の主流になった<sup>(63)</sup>。

また、座面の革は前部3箇所、2列目2箇所、後部3箇所が糸で座面下部に引っ張られている。元々はボタン留めされていた。ほぼすべてのボタンが外れているが、ボタンが付いていた跡が革に残されている。座面の形はアダムデザインとはかなり違うものになっている。座面下部にはクッション性のために、麻のウェビングテープが縦3本、横3本、交互に上下しながら交差して張られている。ウェビングテープの端は座枠に釘で固定されていると思われる。実はこの合計8箇所のボタン留め糸は、座面下部のウェビングテープが交差している箇所を突き抜けて結ばれている。つまり、座面上部の革と座面下部のウェビングテープが、中身の詰物を挟んでしっかりと結ばれているのである。そして、中央部分はボタンが無いので、盛り上がり弾力性を発揮している。このようなしっかりした構造が、座面の形を200年以上にわたって保ってきた要因であると考えられる。

革張りの座の側面は、壁のようになっている。これは日本ではマチ張りと言われるものであるが、現在とは異なる方法で縫製されている。壁の部分を先に縫製した後で、座面の部分に縫い付ける方法で作られているようである。

肘掛椅子の背もたれの革張りを観察すると、座面と同様の箇所がボタン留め糸で結ばれている。このことから、背もたれの革張りの内部にも、座面底と同じように縦3本、横3本のウェビングテープが張られていることが判る。(図22)

## 7 金メッキ真鍮金物 (Gilt Brass Mouldings) と釘 (Nails) (図14、図19、図23)

前述の座の革カバーを座枠に固定するためには、現在であれば裾に玉縁 (パイピング: Piping) を作り、その根元にエアガンから発射されるタッカー釘を打ち込み固定する方



図 19 座枠部分詳細（背面）

法が一般的である。ちょうど玉縁がタッカー釘の頭を隠すようになる。英国ではダブルパイピングが一般的である。日本ではシングルパイピングである。当時はエアガンではなく、釘を手で打つ方法であった。ダブルパイピングの間に釘を金槌で打ち込むことも可能であったと思われるが、ここでは別の方法が採られた。まず革カバーを釘で

座枠に固定し、その上に金メッキされた真鍮金物を被せて、釘頭を隠したと考えられる。さらにこの金メッキされた真鍮金物は装飾性を合わせ持つので一石二鳥である。溝彫りやロゼットなどが背面に無いのと同様に、この金メッキされた真鍮金物も背面に回ったところで、左右とも突然終わっている。真鍮金物の両端は釘でフレームに固定されている。(図 19)

ところで、マチの部分と背柱との境目がどうも上手には処理されていない。マチが背柱に釘 3 本で固定されていることが丸見えである。この点が、素晴らしいこの作品の唯一未完成な箇所である。(図 14)

## 8 麻のウェビングテープ (Linen Webbing-tapes) (図 20、図 21)



図 20 座面下より前脚を見る

1830 年以前のウェビングテープの材料は亜麻または大麻であった。また、18 世紀のウェビングテープは 17 世紀のものに比べて規則正しく高密度で織られている<sup>(64)</sup>。確かにこの椅子の座面底を確認する



図 21 座面下より後脚を見る

と、麻のウェビングテープが使用されている。前述の通り、ウェビングテープは縦3本、横3本が交互に上下しながら張られ、縦横の交差点と座面の革とがボタン留めの糸で結ばれている。

## 9 その他 ― 補強材、ネジ、詰物、など (図20、図21)

補強材：前脚および後脚（背柱）と座枠との連結部分には三角形の補強材が使用されている。脚と座枠とはホゾ組と接着剤で固定されているが、座る人間の体重がかかる脚部にはさらに補強が必要であった。尚、この補強方法は今日まで採用されている。

ネジ：上記の補強材は接着剤で座枠の角に着けられ、さらにネジで固定されている。ネジは鋳物であるので、木製のホゾに比べて強度的には若干落ちる。したがって、補強材はあくまでも補強の域を出ない。当時のネジの頭はマイナスであった。

詰物：修復のために革張りを外す以外に詰物を確認する方法はない。しかし、17世紀後半の時点で椅子の詰物には馬毛（Horsehair）が広く使用されていた<sup>(65)</sup>ことを考えれば、この椅子の詰物にも馬毛が使用されていると考えるのが妥当ではないか。

## VII 様々な問題点 (Several Issues)

### 1 なぜ豎琴なのか

そもそもなぜアダムは、オスタリー、イーティング・ルームのダイニングチェアの背もたれに豎琴のモチーフを用いたのであろうか。豎琴は紀元前からある弦楽器である。旧約聖書にも「立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。」<sup>(66)</sup>、「ダビデがあのかしらシテ人を打って帰って来たとき、……女たちはイスラエルのすべての町々から出て来て、タンバリン、喜びの歌、三弦の琴をもって、歌い、喜び踊りながら、サウル王を迎えた。」<sup>(67)</sup>、「少年ダビデは優れた立琴の奏者であり、サウル王の気分が優れぬ時に立琴を弾いて慰めた」<sup>(68)</sup>という記述がある。また、イーティング・ルームの壁面にはローマ神話を題材とした絵画の中に豎琴を奏でる人物が描かれている。このように宗教的な礼拝の儀式においても、勝利を讃える歌を歌う場合にも、また日常のリラックスを得る音楽を楽しむためにも豎琴は用いられていた。

いずれにしても、楽器は卓越した奏者がかなで始めて美しい音楽が聞こえる。これは論者の推測だが、アダムは晩餐会に出席するゲストを奏者とみなしたのではないだろうか。なぜなら彼らこそ豎琴の椅子に座る主役であり、食卓の会話を導くべき人々であるからだ。

また、1782年のオスタリーの財産目録には、マホガニー材に豎琴の彫刻がされ座が深紅のモロッコ・レザーの椅子12脚<sup>(69)</sup>、これに似合うフランス風の肘掛椅子2脚と記されている<sup>(70)</sup>。ダイニングチェアは全部で14脚あった。ゲストが少ない日には、使用されていない



豎琴の椅子は壁面に配置されたままであって、祝宴に酔ったゲストの目を楽しませたことであろう。

実はオスタリーには、イーティング・ルームの他に、朝食室と図書室にそれぞれデザインの異なる豎琴の椅子がある。図書室の豎琴の椅子はジョン・リネルのデザイン画に酷似している。また、ヨークシャーのノステル・プライオリ (Nostell Priory) にあるトマス・チップペンデル作の豎琴の椅子 (1768 年) も、アダムとリネルによるイーティング・ルームの豎琴の椅子と比較するととても興味深い<sup>(71)</sup>。これらは別の機会に譲ることとする。

## 2 なぜ肘掛椅子には豎琴が無いのか (図 22)

2 脚の肘掛椅子の背もたれには、座面と同じ深紅のモロッコ・レザーが張られていて、豎琴の模様は使用されていない。しかし、肘掛椅子の座面より下のデザインは肘無椅子と全く同じである。また革張りの背は弓形をしている点も似ている。よって、これらはあくまでもセットで製作されたことがわかる。肘掛椅子の方は、ロバート・アダムのデザインではなく、ジョン・リネルのデザインと考えられている。

これは論者の推測だが、この肘掛椅子は依頼主であるロバート・チャイルドの要望によって背が革張りになったのではないか。時々開かれる晩餐会と日ごとの正餐を兼ねた部屋に置かれた主人用の椅子として、背もたれを革張りとすることによって座り心地と快適性を

追求したと考えられる。いつの時代にも依頼主がデザインに関する一番大きな決定権を有する事は否めない。しかし、肘無椅子と肘掛椅子の背もたれのデザインが統一されていないことに奇妙な印象を受けることもまた否めない。

この肘掛椅子と、隣室のギャラリーに置かれているサー・ウィリアム・チェンバースのデザインによりウィリアム・リネルが製作したとされる肘掛椅子とを比較すると、脚回りのデザインと背頭の形状を別にすれば、ボタン留めの位置まで非常に似通っている。

さらにもう一步推理を進めると、ジョン・リネルがウィリアム・ドレーク氏のシャルデロースに納めた『マホガニー材のハーブ・バック肘掛椅子 2 本、5 ポンド 10 シリ



図 22 オスタリー、イーティング・ルームの背が革張りの肘掛椅子

ング』(第Ⅲ章第2節)とは、実はオスタリーのために製作された豎琴の肘掛椅子であったかもしれない。チャイルド氏が肘掛椅子の背の革張りを強く望んだため、製作済みの豎琴の肘掛椅子はリネル工房の在庫になってしまったのではないか。それを在庫処分ということでドレーク氏が購入したとも想像される。これが真実なら非常に興味深い。

実は、ジョンの父ウィリアムが1763年2月に亡くなった直後の5月、工房の相続財産目録が作成される以前と考えられているが、工房の在庫一掃セールが行われたことが知られている<sup>(72)</sup>。キャンセル在庫の処分は、いつの時代、どこの国でも共通の課題である。

### 3 前脚のデザインについて (図23)

アダムによる豎琴の椅子のデザインと、実際にリネルが製作した椅子との大きな相違点は、前脚のデザインである。これはリネルが施した改良点と考えられている。デザイン画

では逆四角錐の形状の脚が、実際は逆円錐になっている<sup>(73)</sup>。デザイン画には、逆四角錐の正面に3本の溝彫りが見られるが、実際は逆円錐の周囲に均等に溝彫りがなされた。これによって、前脚がより一層華奢で上品に見えるようになった。また、逆円錐と座枠の間には凹面状のくぼみがあるので、より一層細さが強調されている<sup>(74)</sup>。

ところが、アダムのデザイン画に見られる脚先の接地部分は、逆に華奢過ぎて強度的に不安があったために、リネルはそこを若干太くして、葉と玉飾り(リーフ・アンド・ボール: Leaf-and-ball)で仕上げている<sup>(75)</sup>。また、アダムのデザインには無いが、リネルは後脚にも前脚と呼応する脚先を付け加えている。

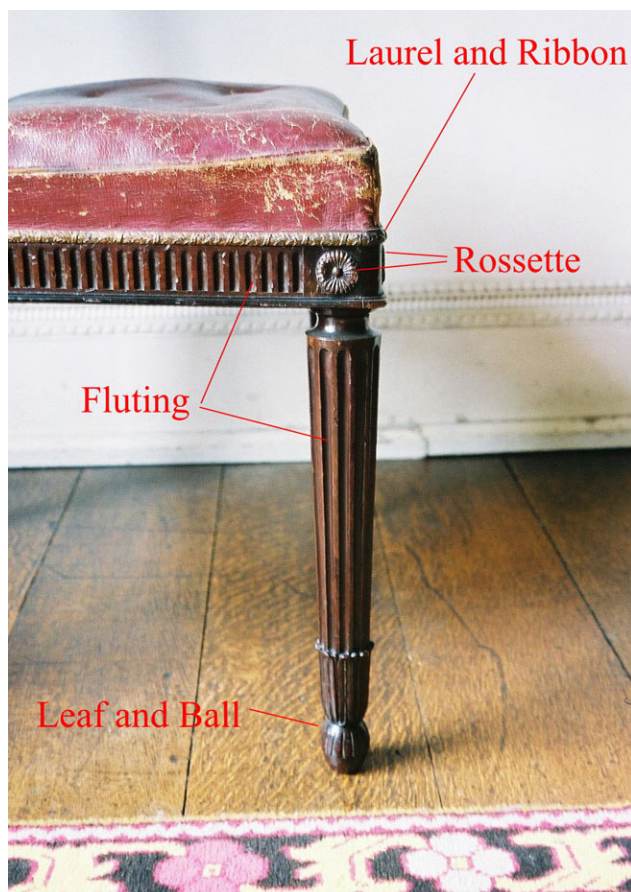


図23 豎琴の椅子の前脚部詳細

### 4 後脚の溝彫りが施された面について (図5、図24、図25)

この椅子を背面から観察すると、とても興味深いことが判る。座枠の背面にはロゼットが無いばかりか、後脚の背面には溝彫りも無い。逆に、後脚の正面には溝彫りがなされて

いる。左右の後脚はそれぞれ、正面と外側に向いている側面の二面だけが溝彫りされている。このことから明らかなのは、この椅子は通常は壁を背にして配置されるために製作されたということである。正面と側面から眺めた時にいかに美しく見えるかという点が特に配慮されている。もし当時この室内にダイニングテーブルが常設され、ダイニングチェアがそのテーブルの周囲に常時配置されていたのであれば、家具デザイナーや家具職人は、この椅子の背面の装飾にもう少し気を配ったことだろう。

実は、アダムスのデザイン画に見るこの椅子の後脚には溝彫りがない。後脚に溝彫りを施したのはジョン・リネルの気前の良いサービスあったか、チャイルド氏に指摘されたアダムスがリネルに追加依頼したのか、アダムスが考え直して追加したのか、定かではない。いずれにしても追加事項であることには間違いない。(図5)



図 25 竪琴の椅子の後脚部詳細（背面）



図 24 竪琴の椅子の後脚部詳細（正面）

しかし、せっかく後脚の2面に彫刻を施したのなら、なぜ4面全部に溝彫りをしなかったのだろうか。追加事項という性格を考慮に入れると、彫刻が少なければ彫刻師に支払う賃金を節約できたからと考えられる。これは洋の東西を問わず、家具職人の現実的な考え方である。いずれにしても詳細は当事者だけが知っている。

## 5 ダイニングテーブルの問題

イーティング・ルームにはダイニングテーブルが常設されていなかった。1782年のオスタリーの財産目録には、北側通路（North Passage）に小さめのテーブルが3台、南側通路（South Passage）に角が丸くなった大きめのテーブル4台を2組が、それぞれ置かれていたと記されている<sup>(76)</sup>。これらのテーブルは必要に応じて室内に運び込まれて使用されていた。同様に堅琴の椅子も必要に応じて使用された。当時の正式な作法では、椅子は通常、壁を背にして室内に配置することが一般的であった。よって食事以外の時は、堅琴の椅子は壁面を背にして室内の周囲に配置され、部屋の中央部分は広く空けられていた。

最盛期のカントリーハウスでは、客人を招いての晩餐会は一般的に正式な大食堂（State Dining Room）や大広間（サルーン：Saloon）で行っていた。しかし普段の食事はもう少し小さな、しかし決して粗末ではない食堂（Dining Room）でとっていた。しかも家族の食卓といえども正装に着替え、執事をはじめ何人もの男性の召使が給仕を務めていた<sup>(77)</sup>。ところが、ロバート・アダムによるオスタリーの改装計画には朝食室（Breakfast Room）はあっても晩餐会用の大食堂および普段の食堂は計画されていなかった。つまりイーティング・ルームは晩餐会と家族の正餐を兼ねる部屋であったと考えられる。

銀行家であり国会議員であったロバート・チャイルドは、自身の銀行の重要な顧客や他の国会議員を招いてイーティング・ルームで晩餐会を催していたであろう。また家族だけの少人数の正餐も同室で行われた。席に着く人々の人数に応じてテーブルの大きさを調整していたのであろう。

## 6 詳細図面はあったのか、試作品はあったのか

ジョン・リネルの家具製作は、まず顧客のために彩色を施した家具デザイン画を作成し、それを気に入ってもらおうと、一旦そのデザイン画を工房に戻してもらっていたことが知られている。そのデザイン画から、彫刻師が作業できるように、より大きな縮尺の図面を引いていたと考えられている<sup>(78)</sup>。それでは果たしてこの椅子の製作図面は存在したのであろうか。元々この椅子はロバート・アダムがデザインしたものであり、それがロバート・チャイルド夫妻に採用されたのであるから、リネル側は製作図面を作成しさえすれば良かった。1ダース12脚もの特別注文の椅子を揃えるためには、現在の家具工場の場合、必ずサイズが入った製作図面を作成し、尚且つ、試作品を製作し、デザイナーと顧客に承認を得てから、全数量を生産することが一般的である。この当時、どのような製作図面が描かれたのか、果たして試作品が作られたのか、などは明らかになっていない。



## VIII おわりに (Conclusion)

以上のように、オスタリー、イーティング・ルームの豎琴の椅子を通して、18 世紀後半の英国家具産業の実像に迫ってみたが、今日の日本の家具産業にまで受け継がれている材料、技術、経営上の問題点などが多く見られた。また、家具はそれが置かれた室内の用途を決定するので、当時の生活を知るための非常に重要な歴史的な手掛かりであることがわかった。そして何にもまして、家具室内調度品を心から愛する依頼主、天才的なデザイナー、一流の家具職人という三つ縊りの糸が、後世に受け継がれるべき装飾芸術作品を織り上げたという点が非常に強く印象に残った。

残念ながら今日の世界では装飾モチーフを椅子のフレームに彫刻することが流行遅れ (Old Fashion) とみなされている。この点では最近の英国もご多分に洩れず、特にロンドン近郊ではこの傾向が顕著である。家具はやはり室内装飾と呼応するものであるから仕方がないのであろうが、一度栄えた技術が衰退していくことは誠に残念である。

実は、今回の調査の前々年、1999 年 2 月に英国のアンティーク家具市場を調査するため、アンティーク・ディーラーのショップやウエアハウスを数箇所訪問させていただいた。この時、その倉庫に眠る中古家具や骨董家具の莫大な数量を実際に見て、改めて 18・19 世紀英国では、家具産業が国家の一大産業であった事実を知った。それらの家具の中から、博物館に収集されて研究者の著作に取り上げられた家具は、本当に幸せな家具であつたろうと感じた。

最後に、この研究を通して痛感するのは、一次資料の保存の重要性である。まず、オスタリー自体がチャイルド家からジャージー卿に代々受け継がれ、愛されて、実に 200 年以上の年月を経て、18 世紀英国の新古典様式の建築と室内装飾芸術をほぼ完璧な形で今日に伝えていることに感嘆する。そしてハウスのほとんどの家具をオリジナルのまま拝見できることに喜びを禁じえない。ハウスの保存と修復に関しては、近年のナショナル・トラストとヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (V&A) (旧) 家具木工部 (Department of Furniture & Woodwork)、(現在) 家具インテリアデザイン部 (Department of Furniture & Interior Design) の方々のたゆまぬ努力があつた。また、アダム兄弟の 9000 枚に及ぶオリジナル図面を購入し、以後保存し続けている、サー・ジョン・ソーン博物館の存在も大きい。また、ジョン・リネルが顧客のために描いた 350 点以上のオリジナルデザイン画が V&A に保存されていることも重要である。このように英国では、家具および室内調度品が装飾芸術品として扱われており、今日でもその資料を礎にデザインビジネスを国家の有効な経済戦略の機軸にしている。日本においても、日本独特および日本に影響を与えた装飾芸術品全般を過去、現在、未来にわたって体系的に収集、保存、整理、調査研究、公開する装飾芸術博物館の設立が強く望まれる。また同時に、歴史的建造物と室内装飾、室

内調度品の保存、修復、散逸物の収集、調査研究、公開が今まで以上に重要になってきている。

#### 本文注

- (1) 田中亮三・増田彰久(1999) p.4、 英国貴族文化や貴族の爵位について pp.90-97
- (2) HARRIS (1994) pp.12-14
- (3) HARRIS (1994) pp.14-16
- (4) HARRIS (1994) pp.16-17
- (5) HARRIS (1994) pp.17-18
- (6) HARRIS (1994) p.31
- (7) HARRIS (1994) p.34
- (8) HARDY & TOMLIN (1985) p.101
- (9) HARRIS (1994) pp.24-26
- (10) HARRIS (1994) pp.27-28
- (11) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.114-115
- (12) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.115
- (13) HARRIS (1994) p.5
- (14) JERVIS (1984) p.19
- (15) JERVIS (1984) pp.19-20
- (16) FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) p.9
- (17) JERVIS (1984) p.20
- (18) FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) p.7
- (19) FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) p.9
- (20) TOMLIN (1972) p.21; HARRIS (1973) p.92; MUSGRAVE (1966) p.193
- (21) TOMLIN (1972) pp.24-25
- (22) HARRIS (1994) p.52
- (23) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.61
- (24) HARRIS (1973) p.100, pl.132 & 133; HAYWARD & KIRKHAM (1980) p.116
- (25) HARRIS (1973) p.92; MUSGRAVE (1966) p.193
- (26) HARRIS (1994) p.50
- (27) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.31
- (28) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.58
- (29) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.5
- (30) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.20, p.58

- (31) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.45-53
- (32) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.5
- (33) THORNTON (1985) p.132; pl.168 Proposal for a drawing - room, England, 1750-60 by John Linnell; pl.169 English design for a grand bed, c.1760 by John Linnell
- (34) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.82-83; vol. II pp.40-41, pl.73, 74, 75 & 76
- (35) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.11, p.37, pp.59-60
- (36) KIRKHAM (1988) p.167
- (37) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.91-92
- (38) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.15-16, p.24
- (39) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.62
- (40) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.117, pp.63-67
- (41) BOYCE (1985) p.184
- (42) HARRIS (1994) p.53; LEWIS & DARLEY (1990) p.194
- (43) FLEMING & HONOUR (1989) p.30; LEWIS & DARLEY (1990) pp.32-33; BOYCE (1985) p.10
- (44) FLEMING & HONOUR (1989) p.613; LEWIS & DARLEY (1990) p.194
- (45) LEWIS & DARLEY (1990) p.228
- (46) FLEMING & HONOUR (1989) p.310; BOYCE (1985) p.109
- (47) FLEMING & HONOUR (1989) p.407; BOYCE (1985) p.146
- (48) FLEMING & HONOUR (1989) pp.10-11; BOYCE (1985) pp.1-2
- (49) FLEMING & HONOUR (1989) p.471; BOYCE (1985) p.169; LEWIS & DARLEY (1990) pp.185-186
- (50) CHIPPENDALE (1762) pl. XIII
- (51) MUSGRAVE (1966) p.97
- (52) HARRIS (1994) pp.50-51; TOMLIN (1972) pp.30-37
- (53) EDWARDS (2000) pp.130-132
- (54) MUSGRAVE (1966) p.192
- (55) EDWARDS (2000) p.131
- (56) EDWARDS (2000) p.44
- (57) EDWARDS (2000) p.44
- (58) EDWARDS (2000) p.44
- (59) EDWARDS (2000) pp.2-3
- (60) EDWARDS (2000) pp.83-84; EDWARDS (1996) pp.100-108

- (61) EDWARDS (2000) pp.171-173
- (62) EDWARDS (2000) pp.167-170
- (63) EDWARDS (2000) pp.121-123
- (64) EDWARDS (2000) pp.239-240
- (65) EDWARDS (2000) pp.97-98
- (66) 新解約聖書 詩篇 33 編 2 節
- (67) 新解約聖書 サムエル記第一 18 章 6 節
- (68) 新解約聖書 サムエル記第一 16 章 14-23 節
- (69) TOMLIN (1972) p.21
- (70) TOMLIN (1972) p.23
- (71) HARRIS (1973) pp.92-93, pl.107, 108 & 109
- (72) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.52
- (73) MUSGRAVE (1966) p.193
- (74) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I p.62
- (75) MUSGRAVE (1966) p.193
- (76) HARRIS (1994) p.53
- (77) 田中亮三・増田彰久 (1999) pp.22-24, pp.39-40
- (78) HAYWARD & KIRKHAM (1980) vol. I pp.60-61

#### 図表出典

- 図 1、6、7、11-14、16-21、23-25 新井竜治 2001 年 5 月 28 日撮影
- 図 2 HARRIS (1994) p.36
- 図 3 The National Trust Photo Library, “Osterley Park, The Eating Room towards the carved gilt mahogany sideboard (1767), pedestals vases & lyre backed chairs all by R. Adam”
- 図 4 HARRIS (1994) p.35
- 図 5 TOMLIN (1972) p.21
- 図 8 TOMLIN (1972) p.24
- 図 9 HARRIS (1994) p.52
- 図 10 HARRIS (1973) pl.133
- 図 15 CHIPPENDALE (1762) pl. XIII
- 図 22 TOMLIN (1972) p.22

#### 参考文献・図表出典の短縮形一覧

- BEARD (1978) Geoffrey Beard, The Work of Robert Adam, John Bartholomew



& Sons Limited, 1978

- BEARD (1997) Geoffrey Beard, Upholsterers and Interior Furnishings in England 130-1840, Published for the Bard Graduate Center for Studies in the Decorative Arts by Yale University Press New Heaven and London, 1997
- BOYCE (1985) Charles Boyce, Dictionary of Furniture, Facts On File Publications, 1985
- CHIPPENDALE (1762) Thomas Chippendale, The Gentleman & Cabinet-Maker's Director: 1762 Third Edition, Dover Publications Inc., 1966
- EDWARDS (1969) Ralph Edwards, The Shorter Dictionary of English Furniture, Published for Country Life Books by the Hamlyn Publishing Group Ltd., 1969 Third Impression
- EDWARDS (1996) Clive D. Edwards, Eighteenth-century Furniture, Manchester University Press, 1996
- EDWARDS (2000) Clive D. Edwards, Encyclopedia of Furniture: Material, Trade and Techniques, Ashgate Publishing Limited, 2000
- FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) John Fleming, Hugh Honour & Nikolaus Pevsner, The Penguin Dictionary of Architecture, Penguin Group, 1980 Third Edition
- FLEMING & HONOUR (1989) John Fleming & Hugh Honour, The Penguin Dictionary of Decorative Arts New Edition, Published by Viking, 1989
- HARDY & TOMLIN (1985) John Hardy & Maurich Tomlin, Osterley Park House, The Victoria and Albert Museum, 1985
- HARRIS (1973) Eileen Harris, The Furniture of Robert Adam, Academy Edition, 1973
- HARRIS (1994) Eileen Harris, Osterley Park Middlesex, The National Trust, 1994
- HAYWARD & KIRKHAM (1980) Helena Hayward & Pat Kirkham, William and John Linnell: Eighteenth Century London Furniture Makers Volume I & II , A Studio Vista Book published by Cassell Ltd., 1980
- JERVIS (1984) Simon Jervis, The Penguin Dictionary of Design and Designers, Penguin Group, 1984
- KIRKHAM (1988) Pat Kirkham, The London Furniture Trade 1700-1870, Furniture History Society, 1988
- LEWIS & DARLEY (1990) Philippa Lewis & Gillian Darley, Dictionary of

Ornament, Cameron & Hollis in association with David & Charles Publishers plc., 1990

- MUSGRAVE (1966) Clifford Musgrave, Adam and Hepplewhite and other Neo-Classical Furniture, Faber & Faber Limited, 1966
- NATIONAL TRUST OSTERLEY (2003) The National Trust, Osterley Website: <http://www.nationaltrust.org.uk/places/osterley/index.html>, The National Trust, 2003
- PARISSIEN (2000) Steven Parissien, Adam Style, Phaidon Press, 2000 Reprinted Paperback Edition
- SNODIN & STYLES (2001) Michael Snodin & John Styles, Design & The Decorative Arts: Britain 1500-1900, V&A Publications, 2001
- THORNTON (1985) Peter Thornton, Authentic Decor: The Domestic Interior 1620-1920, Weidenfeld & Nicolson, 1985
- TOMLIN (1972) Maurice Tomlin, Catalogue of Adam Period Furniture, Victoria and Albert Museum, London 1972
- 新改訳聖書 新改訳聖書聖書刊行会翻訳、聖書 新改訳、聖書図書刊行会発行、1970年9月1日発行、1992年3月1日2版4刷
- 田中亮三・増田彰久(1997) 田中亮三(文)・増田彰久(写真)、英国貴族の邸宅：Robert Adam's Country House、株式会社小学館、1997年2月10日初版
- 田中亮三・増田彰久(1999) 田中亮三(文)・増田彰久(写真)、図説英国貴族の城館：カントリー・ハウスのすべて、河出書房新刊、1999年1月25日初版